

甲賀町のチョウ 今昔

滋賀県の各地でチョウが減少し、何種類かは絶滅、あるいは絶滅の危機に瀕しています。甲賀町でも状況は同じです。私が小学生の頃、つまり今から半世紀以上前と比べて、モンシロチョウやアゲハのような普通種ですら個体数は1割程度にまで減少した印象です。甲賀町神保の、里山に囲まれた我が家の周辺では、畑や山裾にヒョウモンチョウやタテハチョウの仲間が多産し、その中には、甲賀市からその後絶滅してしまったオオウラギンヒョウモン(図1)やウラギンスジヒョウモンがいました。また、クヌギの樹液にはコムラサキ、ゴマダラチョウ、ルリタテハ、ヒカゲチョウの仲間などが集まり、カブトムシやクワガタ、カナブン、スズメバチと樹液をめぐる陣地争いをしており、それを観察していた当時のワクワク感は今でも忘れられません。昆虫の種類も個体数も豊かな時代でした。メタリックグリーンに輝くミドリシジミは当時も珍しかったのですが、山道の、ある場所で見ることができず、その美しさや珍しさに私は魅了されました。少し後の時代になりますが、隣の集落との境界付近の湿地で採集したウラナミジャノメは甲賀町で唯一の記録になりました。家から少し離れた那須が原山では、沢沿いにサカハチチョウが白い花に群がり、その近くの集落でミヤマチャバネセセリを一度に10匹も見ることがあります。これらのチョウは今では絶滅種です。図2にその時の記録と標本を示します。このセセリチョウがいた滝谷は当時すでに廃村でしたが、その後、周辺的环境はすっかり変わり、雑草や灌木が生い茂っています。鈴鹿山脈の麓にキリシマミドリシジミやウラクロシジミが生息することを知ったのは大人になってからです。これらのチョウは実に美しく、まさに甲賀市を代表するチョウといえるでしょう。

チョウの減少にはいくつかの原因が複合的に絡んでいます。農薬散布、圃場整備による地表の掘削、農地の管理方法の変化や管理放棄による草原の荒廃や消失、拡大造林事業時代に植えられた樹木の高木化による下草への日照遮断や落葉広葉樹の減少、林道の舗装、気温の上昇やそれに伴う乾燥化などです。その反面、今も定期的に草刈りを続け、丁寧に草原の維持管理をされている佐山地区のある広大な畑では、数多くのウラギンヒョウモンやモンキチョウ、ベニシジミなどが今も飛び回っています。草原の管理がいかに大事であるかを示す貴重な例です。

一方、子供の頃には目撃すらできなかったのに、その後、甲賀町に侵入し、増えたチョウもいます。例えば、気候温暖化に伴い分布を拡大しているのはナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、クロコノマチョウです。ホシミスジは、庭木として植えられる食草のユキヤナギに卵や幼虫が付いてきたのでしょうか。オオムラサキとゴイシジミが最近記録されたのはとてもうれしいことですし、今後が注目されます。

「生物多様性の重要性」をよく耳にします。チョウなどの昆虫だけでなく、鳥も魚もカエルも獣も、そして草や木も、これ以上の衰退を食い止めるにはどうすればよいのでしょうか。知恵を結集し、豊かな自然を次の世代に引き継ぐ努力が求められています。

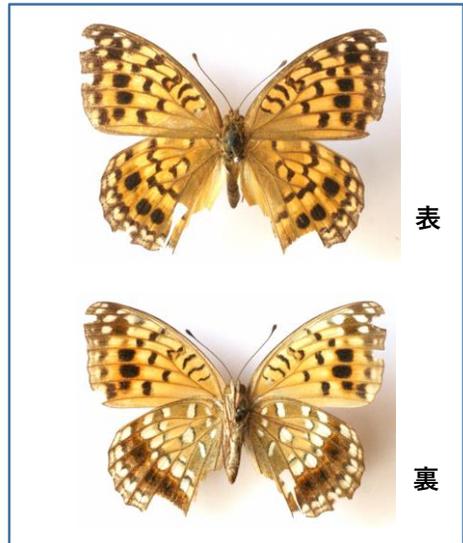


図1. オオウラギンヒョウモン ♀
1962年9月下旬 甲賀町神保

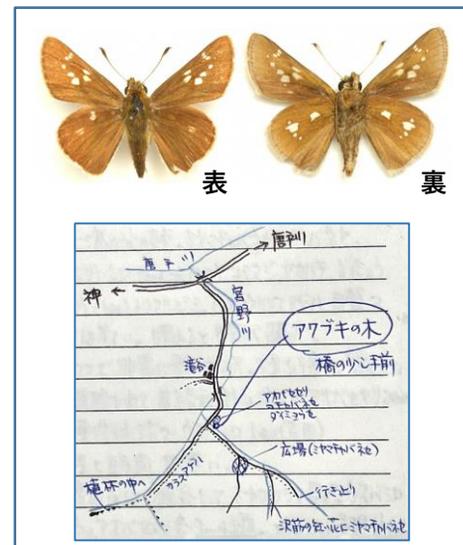


図2. ミヤマチャバネセセリ ♂
1977年5月28日 甲賀町唐戸川 滝谷

森地重博
(大阪府箕面市在住、
日本チョウ類保全協会・日本鱗翅学会)